令和5年 5月1日（毎月1日発行）　赤十字新聞　第996号　昭和24年9月30日　第三種郵便物認可

赤十字NEWS 5

MAY.2023.#996

Japanese Red Cross Society NEWS

5月は赤十字運動月間！

赤十字に寄付したお金は何に使われているの？

特集では…

寄付したお金が使われている、赤十字の活動について詳しく紹介！

※1：2019年内閣府調査「令和元年度 市民の社会貢献に関する実態調査」より、2018年の1年間の行動調査として　※2：2022年3月31日現在

CONTENTS

特集
5月は赤十字運動月間！
赤十字に寄付したお金は何に使われているの？ …… 2

新連載スタート
その時、日赤はどう動く！？
国内災害救護 まるわかり辞典 …… 4

TOPICS
昭和の大横綱から受け継がれる支援の心
宮城野親方（元横綱・白鵬）が献血運搬車を寄贈 …… 4
トルコ・シリア地震から3カ月
紛争の爪痕が残るシリアで求められる支援とは …… 5

AREA NEWS
茨城・佐賀｜支え合う地域づくりに赤十字ができること
地域包括ケア事業の取り組み／他 …… 6

WORLD NEWS
メコン川流域の4カ国での保健衛生支援 …… 8

Present!!

ショウワノート本社工場特製
「ジャポニカ学習帳 オリジナル文具セット」

プレゼント！ 5名様

詳しくはP.7をCheck！▶

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

人間を救うのは、人間だ。

赤十字新聞　編集・発行／日本赤十字社 広報室　〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3　TEL：03-3438-1311　一部 20円　赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

特集

SPECIAL FEATURE

5月は赤十字運動月間！

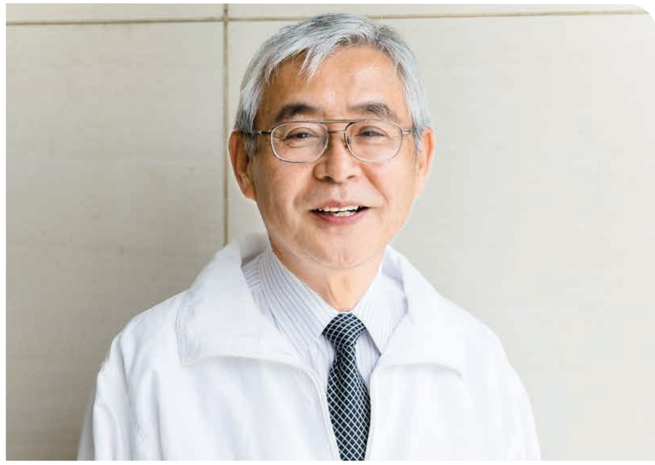
赤十字に寄付したお金は何に使われているの？

日本赤十字社は、毎年5月を「赤十字運動月間」として、日赤が行っているさまざまな活動を広くご紹介し、継続的な支援の呼びかけをしています。今回の特集では、ボランティアとして、また青少年赤十字の元メンバーとして赤十字の活動に参加しているお二人にインタビュー。寄付（会費を含む）がどのように使われているかもご紹介します。

この活動に使われています！

この活動に使われています！

赤十字ボランティア



松戸市赤十字奉仕団 副委員長
赤十字奉仕団支部指導講師
稲積（いなづみ） 修（おさむ）さん

Profile
中学校教員として青少年赤十字の指導に携わり、定年後に地域奉仕団として活動スタート。その後、長年にわたり赤十字奉仕団支部指導講師を務め、令和4年には全国赤十字大会において社長感謝状が贈られた。旧成田赤十字看護専門学校で赤十字概論の非常勤講師をした経験も。

赤十字マークをつけて活動できることに責任と信念を持って

中学校の教員として赤十字と出会って以来、その理念に共感し、定年まで青少年赤十字の指導を続けました。定年後も赤十字と関わっていきたいと思い、赤十字ボランティアになろうと決意。より地域に根づいた活動をしていきたいと考え、地域奉仕団に参加しました。現在は献血の呼びかけや高齢者施設への訪問、定例会での講師など、週に1回のペースで活動をしています。

これまでの活動でとくに印象に残っているのは、熊本地震のときの街頭募金活動。募金箱に1万円札を入れてくださった方が、「赤十字は信用できるからね」と言葉をかけてくださったのです。赤十字の普段の活動は広くは知られていないかもしれないけれど、赤十字マークをつけていることで、好意の目を向けてくださる。それは、先人たちが築き上げてくれた財産ですし、その一員として活動できていることを誇りに思いました。

“人の命を守る”赤十字理念を伝えたい

赤十字の創始者であるアンリー・デュナンの著書の中に、「人道を実現するには、市民が協力するしかないのだ」という一節があります。まさに、今の赤十字の活動もそう。活動資金は寄付によって成り立っていますし、さまざまな活動もボランティアの協力なしには実現しません。その意識を持って、一人でも多くの人に赤十字の哲学や理念を理解してもらうための活動を続けていきたいと思っています。寄付をくださる方たちにも、そのひとつひとつが人道の担い手、平和の担い手としての第一歩であると認識してもらえたらうれしいですね。

赤十字ボランティアとは

赤十字の理念に賛同した方々が、全国各地で活動しています。各地域のニーズに応じた活動を行うとともに、赤十字防災セミナーや各種講習への協力など赤十字事業にも参加している他、自身が持つ特殊な技能を活用した活動も展開しています。ボランティア育成にかかる研修や会議およびボランティア活動にかかる経費を助成するために、寄付が活用されています。

左／松戸献血ルームPureで献血の呼び込みボランティアをする稲積さん、中／日赤本社で行われた支部指導講師（各支部で赤十字ボランティアの指導をするスタッフ）の研修、右／千葉県支部で奉仕団研修会の講師を務める稲積さん

この活動に使われています！

青少年赤十字（JRC）

埼玉県青少年赤十字
卒業生奉仕団 副団長
加藤（かんな） 緩凪（ゆるな）さん

Profile
2001年生まれ、現在大学4年生。高校生のときに部活動を通じて青少年赤十字に参加。ベトナム派遣ホームステイの受け入れや、自らも韓国派遣でホームステイを経験するなど、国際交流に力を入れる。現在は卒業生奉仕団としての活動する一方、赤十字ユース委員会のPR推進チームでも活躍。

「赤十字といえば病院や献血」そんなイメージを変えたJRCの活動

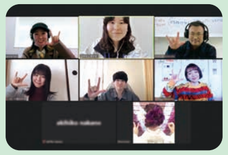
私とJRCとの出会いは、高校のとき。国際文化交流部という部活動の一環でJRCに携わったのが最初です。赤十字といえば病院や献血のイメージしかなかったですし、ボランティアに強い関心があったわけでもないので、初めは「私に何ができるの？」と半信半疑でした。赤十字がどんな団体か分からず、少し怖いとも感じていました。でも、勉強会や合宿に参加する中で、赤十字の理念や人道を学び、「自分は人のために何ができるのか」を深く考えることでたくさんの気づきを得て、もっと赤十字に関わっていきたいと考えるようになりました。

“自ら気づき、自ら考えて、動く”人として成長できるJRCの学び

元々国際交流に関心があり、海外のJRCメンバーをホームステイで受け入れたり、自分も韓国に渡ったりと、したかった国際交流ができたこともあり、JRCの魅力にハマった私は高校卒業後も卒業生奉仕団としてJRCをサポートしています。JRCの合宿では、主体的に考えて計画・実行するという経験を積むので、合宿が終わったときに自分の成長を実感できます。災害支援に携わった方の経験談を聞けるなど見識が広がるだけでなく、活動を通じて言葉使いや社会的マナーを身につけることもできて、活動の一つ一つが学びの機会になっています。

赤十字の活動を広めるために

海外の紛争の影響で国や人種で区別・差別をする人を見かけることがあります。でも「そう考える人もいるけど、自分はそう考えない」と、誰かを責めることも同調することもなく、自分の考えを保っていられるのは、赤十字の「中立」の理念があるから。赤十字を知らない人に活動や理念に触れてもらいたい。自分で企画して全国47都道府県の奉仕団のSNSアカウントを収集したので、新しいPRを展開したいと考えています。



左／JRCトレーニングセンターで発表する高校生のときの加藤さん、中／埼玉県青少年赤十字卒業生奉仕団主催の手話学習会、右／大宮アルディージャ「手話応援デー」で手話活動をサポートするため、試合会場で赤十字に関わるブースを出展

青少年赤十字（JRC）とは

未来を担う青少年が実践活動を通して自ら「気づき、考え、実行」できる学びの機会を提供し、赤十字思想を持った子どもたちの育成を行っています。JRCメンバーや指導者を育成するための研修や、国際交流事業、教材などの作成費に寄付が生かされています。

まだまだある！

寄付が使われている日赤のさまざまな活動

全国から集まった寄付は、日赤の多岐にわたる活動に生かされています。国内災害救護や国際活動、身近な人の命を守るための救急法などの講習について、その一部をご紹介します。

国内災害救護／防災セミナーの普及　国際活動　救急法など講習の普及

この活動に使われています！

国内災害救護／防災セミナーの普及

災害時の救護活動を確実に行うための体制づくり

日赤は、災害発生時にいち早く救護班などを派遣し、被災地で必要な救護活動を行います。また、救援物資の配布や義援金の受け付けなどの役割も担っている他、災害発生に備え、日頃から研修や訓練による人材の育成などに取り組んでいます。さらに、住民の防災力を高めるために、全国各地で赤十字防災セミナーの普及にも取り組んでいます。

この活動に使われています！

国際活動

国際的ネットワークを生かした人道支援活動

192の国と地域に広がる赤十字社のネットワークを生かして、日赤は世界中の災害や紛争、病気などで苦しむ人々を救い、支えるための活動を行っています。人道危機発生直後の緊急救援だけでなく、その後の復興支援から開発協力まで、困難な状況にある人々が自ら立ち上がるために、切れ目なく、息の長い支援を行っています。

この活動に使われています！

救急法など講習の普及

命や健康を守るための知識と技術の普及

身近な人を救うため、心肺蘇生とAEDの使い方、日常生活における事故防止、急病やけがの応急手当、災害時の心得など、命や健康に関する技術と知識を広めるための講習（「救急法」「水上安全法」「雪上安全法」「健康生活支援講習」「幼児安全法」）を行っています。全国の日赤支部・施設で開催する他、その地域のニーズに応じて指導員を派遣します。

TOPICS

1 TOPICS

昭和の大横綱から受け継がれる支援の心
宮城野親方（元横綱・白鵬）が献血運搬車を寄贈

輸血用の血液製剤を安全かつ迅速に医療機関へと届けるために、欠かすことのできない献血運搬車。日赤では、多方面からの支援をいただく中で、この献血運搬車の拡充への協力も受けてきました。とくに昭和の大横綱であった故・大鵬さんからは、1969年から2009年までの40年にわたり、計70台の献血運搬車**「大鵬号」**が全国の血液センターに寄贈されています。

その支援活動は、次代の横綱であった現・宮城野親方に受け継がれ、2017年には**「白鵬号」**が誕生。さらに2023年2月、2台目となる**「白鵬号2」**の贈呈式が行われました。宮城野親方は、**「“角界の父”と慕う故・大鵬親方は、熱心に社会貢献活動を行ってこられました。その偉大な遺志を受け継ぎ、今回、2台目の献血運搬車を寄贈させていただくこととなりました。今後も故・大鵬親方が行ってきた社会貢献活動を代わりに続けていければと思っています」**とコメント。多くの人の命を救うことにつながる支援に感謝をするとともに、今後も日赤はその意志に応えるべく安全な血液製剤の安定供給に努めていきます。

「白鵬号2」の贈呈式に出席した宮城野親方（右）と日赤本社血液事業本部 髙橋本部長（当時）

column

その時、日赤はどう動く!?

国内災害救護 まるわかり辞典

日赤の救護活動についてさまざまな角度から紹介するこのコーナー。
今回は【安全に救護活動を行うための**救護員作業衣**】です。

災害が発生したときに、被災地で救護活動を行う日赤の救護員。その救護員が身につけているユニフォームは、被災地での日赤の存在を表現するデザインとなっています。正式名称は**「救護員作業衣」**と呼ばれ、耐久性がありながら動きを妨げない柔軟性のある生地で作られていて、救護員それぞれの体型に合わせた細かい寸法で着用可能です。また、通気性のある夏用と厚手の冬用があり、遠くからでも分かるように、背中には日赤のシンボルマークがあしらわれています。加えて、胸の部分には、医師や看護師といった職種を示すワッペンを取りつける箇所があります。この他に、作業帽とヘルメット、つま先が鉄板などで保護された安全靴、作業衣の上から着るベストも用意されています。これらのデザインは、救護員が統一された服装で活動することで、被災地の方々が日赤の存在を認識しやすくすることを目的としているため、活動を行う環境によって腕まくりや襟の開閉の仕方などに細かいルールが定められています。

救護員作業衣
日赤の救護員であることが視認しやすい色使い、デザインが特徴。無線を取り付けるループやポケットなども設けられている。

ベスト
作業衣の上から着用するベストには、医師や看護師といった職種が大きく書かれており、各救護員の役割を分かりやすくする工夫がなされている。

2 TOPICS

トルコ・シリア地震からおよそ3カ月
紛争の爪痕も残るシリアで求められる支援とは

日赤はこれまでも国際赤十字を通じて、紛争下のシリアで、シリア赤新月社が行う巡回診療などの人道支援活動を支えてきました。そのような中、**今年2月に大地震が発生し、シリアの人道危機は深刻さを増しています。**現在の状況の把握と今後の支援ニーズを確認するため、同国被災地であるアレッポとラタキアに入った日赤本社職員の片岡昌子さんからのリポートです。

「現地を訪れ、12年におよぶ紛争の爪痕に衝撃を受けました。紛争で破壊されたのか、今回の地震で倒壊したのか、見分けがつかない建物やがれきだらけでした。多くの人々が避難所生活を送る学校では、シリア赤新月社などの手で食料が届けられる一方、マットレスを敷いただけの教室に5～6家族が寝泊まりをし、シャワーや入浴設備はなく、満足に洗濯もできない状況でした。調理できる設備もないため、温かい食事も十分にとれません。衛生環境が悪化する中、コレラなど感染症の発生も懸念されています。また、アレッポ市内にあるシリア赤新月社の子ども病院の院長によると、今回の震災は負傷された人や家財を失った人たちだけでなくアレッポに暮らす全ての人々の心に影響を与えているとのこと。パニックを起こしたり、不安な様子を急に見せたりする子どもが震災後に増えているそうです。同院では国際赤十字の支援も受けながら、**『こころのケア』**にも取り組んでいきたいと院長は述べました。一方で、かつての戦争と震災から復興した日本に学びたいという声もよく聞きました。**日本のアニメはシリアの子どもや若者に人気で、街中で『ありがとう！』と日本語で声をかけられることも。**私は、過酷な状況でも希望を持ち続けようとする被災者の方々に対して、そして、**自らも被災者でありつつ絶え間ない支援活動を続ける赤新月社のスタッフやボランティアにも、日本の皆さんからの連帯と応援の気持ちを伝えました**」

被災地のアレッポでシリア赤新月社のスタッフとともにニーズ調査を行う片岡さん（右）　©シリア赤新月社

これからシリアの人々が立ち直っていくために、日赤は国際赤十字とともに被災された方々に寄り添った支援を続けていきます。

シリアでもとくに被害の大きい都市・アレッポでも支援活動が続く。現地には食料や仮設住宅セット、衛生キット、医薬品などの救援物資が届けられている
©シリア赤新月社

トルコ・シリア地震の赤十字の対応はこちらから ≫≫
（救援金募集のリンクもあり）
https://www.jrc.or.jp/

献血の歴史やトリビアが満載！

献血なるほどヒストリー vol.2

献血にまつわるさまざまなエピソードを紹介する連載コーナー。第2回は、献血推進と買血追放運動に立ち上がった高校・大学の学生たちのお話です。

「黄色い血を追放したい！」
社会を動かした学生たちの熱い思い

戦後の混乱期を経て、日赤の血液銀行が開設されるなど安全な輸血用血液の確保を目指す社会の気運は高まっていましたが、一方で自ら血液を売る**「売血」**は社会に定着し、低所得者が過度の採血によって重症の貧血に陥ったり、買い取った**「買血」（黄色い血※）**の輸血で患者がウイルスに感染するなど、買血制度による深刻な健康被害は後を絶ちませんでした。このような社会情勢に目を向けて立ち上がったのが、高校・大学の学生たちです。

1959年以後、高等学校の青少年赤十字を中心に献血啓発活動が広がり、高校生の集団献血が盛んに行われました。また1962年、4月に関東の大学29校が団結して献血を行い、9月には学生の全国組織**「日本赤十字献血学生連盟」**が結成され、献血推進と買血追放運動が精力的に展開されました。これらの活動に合わせて各メディアも全国的に買血制度の実態を取材して報道。輸血用血液はすべて献血によるべき、と訴え続けました。

学生たちの献血運動は盛り上がり、1965年ごろの学生献血は全献血量の34.6%を占めましたが、1966年10月、東京都立養護教諭研究会から健康上・教育上の懸念から高校生献血反対の声が上がります。その声は各地に波及し、教育長が高校生の集団献血を禁止する都道府県も。一時、学生献血の半分以上に当たる高校生献血が著しく低下しましたが、専門家の意見を踏まえて**「高校生の集団献血はさしつかえない」**という方針が各地で出され、徐々に高校生献血は従来の形に戻りました。買血制度は1969年まで続きましたが、その裏では、純粋な思いによって献血を推進した人々の努力が積み重ねられていました。

1964年、日本赤十字献血学生連盟は「日本一周献血運動キャラバン隊」を結成、乗用車でPR行脚をした

※金銭を得るために短い期間で頻ぱんに献血を繰り返す人の血液は赤血球が少なく、黄色い血しょう部分が目立ち、「黄色い血」と呼ばれた

AREA NEWS

エリアニュース

全国各地、あなたの生活のすぐそばで
日本赤十字社の活動は行われています。

茨城・佐賀 支え合う地域づくりに赤十字ができること 地域包括ケア事業の取り組み

▲日赤茨城県支部

▲日赤佐賀県支部

医療や介護が必要な状態になっても、可能な限り住み慣れた地域で自分らしい生活を続けられるよう、地域で支える「地域包括ケア」事業。

日赤茨城県支部では3月下旬、同事業の取り組みとして笠間市社会福祉協議会と連携し、高齢者サロン代表者に対し健康生活支援講習を実施。参加者からは「家庭内外で起こる事故の予防や手当てが学べて参考になった」と、定期開催を望む声が。

また、日赤佐賀県支部では、2月28日～3月1日に開催された市主催の「佐賀市生活・介護支援サポーター養成講座」に講師を派遣。災害が及ぼす高齢者への影響を伝え、自分自身や大切な人を守り、地域全体として支え合うことを考え、備える機会としました。

茨城 「キャンプの知識で生き抜く」 体験型の防災イベントを開催

3月19日、茨城新聞社と日赤茨城県支部の共同で「親子で体験！BOSAI キャンプ」が初開催され、約600人が参加しました。キャンプの技術は災害時にも役立つため、その知識やスキル習得も本イベントの目的です。火おこしやロープワーク講座の他、心肺蘇生体験や炊き出し、テント設営、起震体験など多くのブースが設けられ、参加した親子は楽しみながら、自助・共助の防災意識を高める機会となりました。

埼玉 感染対策が続く「特養」 満開の桜に心弾ませて

3月下旬、日赤埼玉県支部が運営する「特別養護老人ホーム小川ひなた荘」では、敷地内の桜が見事な花を咲かせました。新型コロナウイルス感染症は5月8日から5類に移行し、社会では感染対策の緩和が進みますが、同施設では感染リスクの高い入居者を守るため、窓越し面会、イベント縮小などの対策を継続しています。外出もままならない入居者と施設職員にとって、桜の開花はうれしい便りとなりました。

静岡 “炊き出し”で心を寄り添わせて… 「炊き出しリーダー」養成講習会実施

3月1日・2日、日赤静岡県支部では、地域赤十字奉仕団を対象に、炊き出しリーダー養成講習会を3年ぶりに開催。参加者30人が、災害時の炊き出しの注意やコツを学びました。また、日赤の「こころのケア」指導員が講師となり、「被災された方々への接し方」の講義も実施。炊き出しは貴重なコミュニケーションの機会となることから、傾聴や特に配慮が必要な方々への対応を学び、実技の一環で参加者が互いにリラクゼーションを実践しました。

京都 海上保安本部との合同訓練を初開催 巡視船を使って海上での救助を学ぶ

日赤京都府支部と舞鶴海上保安本部は、2013年に海上災害などで相互協力する協定を締結。それ以来初となる合同訓練を、若狭湾上の巡視船「だいせん」にて行いました。舞鶴市沖まで船を出し、揺れや騒音がある中でヘリコプター格納庫に担架やベッドを設営し、船の医務室設備などを確認。想定より音も揺れも大きく、コミュニケーションが取りにくいなど、机上では得られない学びのある貴重な機会となりました。

神奈川 おくすりシートをリサイクル 塵も積もれば…5カ月で20kg回収！

横浜市立みなと赤十字病院では、「おくすりシートくるりんBOX」を設置し、使用済みPTPシート（おくすりシート）を回収・リサイクルする取り組みを行っています。これは、プラスチック問題への関心を高めるために横浜市、製薬会社、リサイクル会社が協力して始めた事業で、回収されたシートはプラスチックとアルミニウムを分離後、リサイクル処理で新たな製品に生まれ変わります。設置5カ月で合計20kgを回収するなど、徐々に回収量が増えてきているため、今後は設置個数も増やしていく予定です。

昭憲皇太后基金

100年たった今も受け継がれる思い 「基金」の支援先が決定

毎年4月11日のご命日にあわせて「昭憲皇太后基金」が配分されます。この基金は、1912年に昭憲皇太后が各国赤十字社の平時事業を奨励するために寄付された10万円（現在の3億5000万円相当）を基に創設された世界最古の人道援助基金です。今年は13カ国の赤十字・赤新月社が手がける事業に対して、総額5338万円相当を拠出しました。第1回から第102回の今回までの累計額は23億円相当、配分先は171の国と地域に上ります。

昭憲皇太后が奨励された「平時における人道支援」という御心に、現在も深い敬意と感謝が寄せられています

【今年の配分先となった赤十字社（例）】

- ホンジュラス：ボランティアが開発し、主導していく事業を支援する基金を設立。
- ベルギー：気候変動について学べるデジタルコンテンツの作成。
- ギニア：出産による母子の死亡率を低下させるため、基礎的な産科救急および新生児ケアの質の向上を図るモバイルアプリの開発。

※上記含む13カ国の赤十字・赤新月社の事業に配分

詳細は日赤WEBサイトをご覧ください

鳥取 トルコ・シリア地震の被災者へ 小学生がトルコ語で手紙を

境港市立中浜小学校では児童会が中心となり、トルコ・シリア地震のための募金が集められました。また、6年生の2人は、トルコ語で手紙を。WEBの翻訳機能を使って言葉を調べながら、「とても心配しています」、「東日本大震災で日本を助けてくれてありがとう。次は私たちが助けたい」といった言葉をつづり、折り鶴と共に、寄付先の日赤鳥取県支部に託しました。この手紙と折り鶴は、3月半ばにトルコに派遣された日赤職員を通じて届けられました。

千葉 幕張の浜で伝える 3.11の教訓から学ぶ防災

3月11日、東日本大震災の発生から12年目となるこの日、千葉県・幕張の浜辺で開催されたビーチクリーン活動（主催：Aqua Dream Project）の冒頭で100人超の参加者を前に、震災を振り返り、防災についてお話しする機会を得ました。日赤千葉県支部の職員が、日頃から啓発している震災の教訓や“備え”の重要性を伝えると、参加者からは「身が引き締まりました」「帰ってから家族と話し合います」といった声が寄せられました。

Present!!

子どもたちの知的好奇心を育み、教育を通してより豊かな社会をつくる

パートナー企業 ショウワノート 株式会社

富山県高岡市のショウワノート本社工場ではAED講習会開催や、献血活動も積極的に実施

1970年の発売以来、愛され続けるロングセラー「ジャポニカ学習帳」を送り出すショウワノート株式会社。同社は創業の精神である「常識に拘泥しないアイデアと努力」をモットーとし、人々から信頼される企業であり続けることを目指しています。

主力商品である学習帳や文具などは、子どもたちの学習への意欲、好奇心を育むさまざまな工夫をこらし、社会貢献活動としては、ベルマーク教育助成財団への協賛として教材備品などを贈り、教育援助活動に貢献している他、「植樹の会」プロジェクトによる環境活動、そして、従業員の献血への協力やAED講習会への参加、赤十字活動への寄付などに取り組んでいます。こうした姿勢は、「ジャポニカ学習帳」にも表れており、世界の珍しい動植物の写真が使われた表紙には、地球を愛する心を育んでほしいという思いが込められ、この他にも地球環境への関心を高める読み物が「学習百科」ページに掲載されています。

5名様 ショウワノート本社工場特製「ジャポニカ学習帳 オリジナル文具セット」

プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・WEBでご応募ください。
①お名前 ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢 ⑤赤十字NEWS5月号を手にされた場所（例／献血ルーム） ⑥5月号に関するご意見・ご感想
※ご応募いただいた個人情報はプレゼントの発送および弊社からのお知らせのみに利用いたします

郵送／〒105-8521東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS5月号プレゼント係
WEB応募／右の2次元コードからご応募ください。
5月31日（水）必着 ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

ご応募はこちらから

WORLD NEWS
―ワールドニュース―

メコン川流域ってどんなところ？

熱帯気候のメコン川流域では、洪水、干ばつ、暴風雨、森林火災などの自然災害によって、多数の避難民が生まれている。また周辺4カ国それぞれで文化や政治体制が異なり、必要な支援も多岐にわたるため、現地の人々に寄り添った保健衛生活動が求められている。

メコン川流域の4カ国での保健衛生支援

異文化の壁を越える、赤十字の支援活動

日赤では、世界中の保健医療支援を必要とする地域に、多くの医師や看護師などを派遣しています。今回は、国際赤十字・赤新月社連盟（IFRC）バンコク事務所に保健要員として出向している木村仁美さんに、活動内容を聞きました。

木村さんの業務を教えてください。

IFRCは、日赤を含む世界192の赤十字社と赤新月社が加盟し、世界60カ所以上に事務所を置いている人道支援団体です。私は、タイの他にメコン川に接するラオス、カンボジア、ベトナムを含む4カ国での保健衛生事業に携わっています。各国の保健衛生活動を支援するために事業計画を立案し、現地での支援状況をモニタリングしたり、急な災害発生に対応できる現地の組織作りをしたり、スイスのジュネーブにあるIFRC事務局やさまざまな機関との調整などを行っています。メコン川流域は、干ばつや洪水などの自然災害の他、熱帯圏特有の感染症や疾病もあり、医療サービスを求める人が多いです。さらに、**各国の政治的な事情や宗教、文化など、あらゆるバックグラウンドを考慮しながら、事業を慎重に進めていく必要があります。**

具体的にはどのような保健衛生活動が展開されているのでしょうか？

新型コロナウイルス感染症への対応として、タイ赤十字社では国家的な予防接種活動を移民にも展開し、私はそのサポートに携わりました。タイは多くの国と国境に接し、周辺国からの移民が約390万人いるとされています。移民の中には自然災害や、政治的情勢の影響で避難した人々も含まれます。彼らの多くは身分証明書を持たず、同時に個人が特定されることを忌避することも少なくありません。しかし、感染症拡大を防ぐためにはより多くの人に予防接種を行う必要があり、プライバシーを守ることを覚書で約束して予防接種を受けてもらいました。また、予防接種は誰がいつ接種を受けたかという情報を管理することが重要です。今回の予防接種活動では、IT企業と協力し、顔認証や虹彩認証によって接種者のデータを記録するシステムを開発し導入しています。加えて、タイの保健省とも連携し、国籍や市民登録がない人のデータを登録できる環境を構築しました。移民や難民への医療支援は、メコン川圏だけでなく世界的な課題です。今回の最新テクノロジーを活用したデータ管理の手法は、新型コロナの対策だけでなく将来の支援活動にも生かせる、とても価値のあるものだと感じています。

感染症対策など緊急的な支援活動と共に、救急法などの日常的な活動にも注力されていますね。

メコン川圏は、医療アクセスが難しい地域がほとんどですが、保健医療に携わる人材不足や交通事故の多発などにより、救急法の普及が命を救うことに直結しています。IFRCは2030年までに「プレホスピタルケア」の普及を目指しています。**「プレホスピタルケア」とは、医療機関に行く前にできる応急手当てのこと。**その一環としてタイの仏教寺院における救急法指導を実施しています。タイ国内には約3万もの仏教寺院があり、約40万人の僧侶、参拝客の他、学校を持つ寺院には多くの子どもたちが通っています。幅広い年代に命を守ることの大切さ、そのために役立つ情報を発信することも私たちの役割です。

この他、ベトナムでは、交通事故の多い地区に「モバイル救護室」として赤十字ボランティアが交代で運営する仮設救護室を展開。カンボジアでは学校カリキュラムに救急法を導入したり、ラオスでは医療アクセスが困難な地域において住民同士で命を守るために救急法を普及するなど、各国の事情に応じた支援をしています。

地域の特性、文化に寄り添った支援活動が求められているのですね。

タイには赤十字病院などの医療施設があるため、比較的円滑に保健支援活動ができる一方、他の3カ国には赤十字が直接運営している医療施設がなく、またベトナムやラオスは社会主義国家であるため、政府とのより緊密な調整を求められることがあります。さらに、多民族国家・多文化社会として知られるメコン川流域の国々で、**移民や民族を取り巻く状況を知識として知っていても、現地の人々が持っている感情や認識を完全に理解することは簡単ではありません。**私は、IFRCの保健要員として支援をする立場で、地域の医療施設や実際に現地で活動している人々が持つ知見から学ぶことがたくさんあります。これからも現地の人々の声を聞き、私たちができることは何かを常に考えながら、一人でも多くの人を救うための活動に励んでいきたいと思っています。

タイ赤十字社では、新型コロナウイルス感染症に対する予防接種活動を移民にも実施。身分証明を持たない人々に向けて、顔認証や虹彩認証によるデータ管理システムを導入した

タイの仏教寺院での救急法の普及活動。僧侶は女性に触れることができないため、男性のボランティアが同行して講習するなど配慮している

ベトナム赤十字社では、バイクなどによる交通事故の多い地区に「モバイル救護室」を設置。基本的な医薬品や応急処置のための道具、担架などが配備されている

木村 仁美
（きむら ひとみ）
大森赤十字病院 看護師、
IFRCバンコク事務所
保健要員

日本赤十字広島看護大在学中から海外のさまざまな研修に参加し、バングラデシュ避難民キャンプにも派遣された。派遣地のコミュニティの中に入り、人々に寄り添う保健衛生事業にやりがいを感じている。